

時寛文中新京丹使用に際し、口米の量を減じて前の扶持米拾石を十八俵(九石)に改められ、子孫世々之を襲いだ。

**イマツノキモイリ** 今津の肝煎 加賀藩領近江今津村の肝煎は、初め源三左衛門・孫右衛門・喜左衛門・四郎左衛門順次之に宛つたが、寛文中改めて源三左衛門の外、新たに次郎大夫に命じ、在來の給米二石五斗を減じて四俵二斗五升(二石二斗五升)とせられた。天和三年源三左衛門が死んで、新右衛門之に代つた。又弘川村では、初め次郎右衛門が肝煎となり、慶長中から石見助之に代り、寛永十二年から二代石見助、萬治元年から三代石見助となり、寛文中初期以來の給米二石五斗は、また四俵二斗五升に改められた。

**イマニシ** 今西 石川郡中奥郷に屬する部落。  
**イマハザカ** 今羽坂 鹿島郡一青庄に屬する部落。もと羽坂の出村であつたからの名である。

**イマハマ** 今濱 羽咋郡押水北庄に屬する部落。能登名跡志に、『此宿は昔は荒地のすて濱なりしに、上は川尻村は水難に退轉し、下は宿村とて未森の城下に驛ありしに、是も兵火に中絶して有しに、其後子浦或は一宮より高松まで驛なくては往來便あしきにより、御會議ありて、近里細見村・新保村・鍋坂村の三ヶ村を此所へ合せて、新宿に被仰付しより今濱の名有。今は内外の追分の驛なれば、次第に繁昌して獵師商家出來。内浦へ行くは子浦にて馬次也。外浦に行くは一宮にて馬次也。』と見え、三州奇談に今濱の陸石と題した一説がある。

**イマハマガハ** 今濱川 源は羽咋郡針山から出て、平床を過ぎ、吉田に至つて吉田川といひ、今濱村に至つて海に入る。その下流に於いては相見川の稱がある。

**イマハマシン** 今濱新 羽咋郡押水北庄の一部落であるが、文政頃の村名中にはまだ見えない。

**イマハマワカミヤハチマン** 今濱若宮八幡 羽咋郡今濱の氏神で、相見神社の御子神なりといひ、その祭禮を初める時は、必ず相見神社に奉告した後に行ふを例とした。

**イマフルツカ** 今古塚 石川郡に南笹塚・北笹塚の二部落があつて、各一の古墳を有する。その北笹塚なるをオマレ塚と呼び、南笹塚なるを琵琶塚と稱し、而して里人は前者を三代實録光孝天皇和元年十二月廿一日の條に見えた節婦道古今、後者をその夫加賀權藤大神高名の墓であると定めてゐる。此の説は、津田鳳卿の掠郡考古遊記に記されるに至つて益確實なるが如く信ぜられたが、その非なることは、森田柿園の加越能氏族傳に『抑此兩塚、いにしへいかなる人の墳墓ならん。中略。近く好事家の説を立て、琵琶塚は正しく大神高名が古墳、オマレ塚は道今古が墳墓なることいちじるとして、今は皆その説に隨ひ云々。』といふ通りである。按ずるに好事家のかゝる説を捏造した原因は、北笹塚の地が近代の石川郡大野庄に屬して、三代實録に今古を加賀郡大野郷の人であると記したに相類するものあるに因る。しかし、この地は押川以南で、固より石川郡に屬し、決して加賀郡ではない。況や平安朝に入つて此等の高塚が築造せられたかつたことは論がない。且つ琵琶

塚といふは、二子塚・車塚・瓢塚などの別名であるから、この塚が前方後圓であつたことを暗示するものに外ならぬ。それを三輪塚の訛であるとすれば、大なる誤謬である。

**イママチ** 今町 金澤の町名。元祿三年火災記に、尾張町・上今町・下今町とあつて、今も上・下に分かれてゐる。

**イママチ** 今町 白山宮莊嚴講中記録文明十二年十月十六日の條に、白山本宮の焼失したことを記して、火は今町の公人道德の家から出たとある。今町は石川郡鶴來のうちで、今もその名がある。

**イママチ** 今町 河北郡五ヶ庄に屬する部落。越後記の天正二年上杉謙信が加賀に侵入したことを述べた條に、今田喜田森本に火を放つたとあるは、今町・北森下の誤であるが、北越太平記には更に之を混じて今由木として居る。

**イマミナト** 今湊 能美郡湊の舊稱。源平盛衰記源永二年に、『源氏は安宅、湊よりおちて、今湊・藤塚・小川濱・倉部・雙河打過つて、大野庄に陣を取。』とあり、又太平記延元三年越後勢上方へ進發の條には、『加賀國に暫く逗留して行末の兵糧を用意すべしとて、今湊宿に十餘日まで逗留す。』と記する。

**イマミナトジンジャ** 今湊神社 能美郡湊に鎮座する。一村の産土神で、もと八幡宮と稱したが、明治七年今湊神社と改稱した。  
**イマミナトノワタシ** 今湊渡 石川郡本吉(今の美川)と能美郡湊との間、手取川の渡場を今湊渡とも湊渡ともいうた。正保四年の調帳には、舟渡幅六十五間、深さは六七尺、出水には廣さ深さ過分に變るとある。

**イマムラキユウベエ** 今村久兵衛 前田綱紀の時二百二十石を領してゐたが、天和元年に歿した。第五代政之助の時、幼少で三の一を受けてゐた間に寶曆十年早世して、家系断絶した。

**イマムラサンジュウロク** 今村三十六 金澤の俳人、又卅六とも書き、六々庵ともいふ。名は紹由。元祿六年牧童・句空・友琴と共に金澤の郊外猿丸宮に奉納した附合を集め、題して猿丸宮集というた。

**イマムラスケダユウ** 今村助太夫 初めて前田利長に召出されて八百石を領し、子孫藩に世襲した。

**イマムラトウジロウ** 今村藤次郎 天正四年父兵部に先だつて前田利家に越前府中に仕へ、知行與力知共に三千石に至り、後利政に屬し、慶長四年病歿した。子五郎兵衛は七百石を受けて利長に従ひ、後裔世々藩臣に列した。

**イマムラトウジロウ** 今村藤二郎 諱は國光。前田利家に仕へた。天正十年越後の軍が海路能登を侵さんとする風聞のあつた時、藤二郎は宇出津附近の浦目付であつたが、越中魚津の陣中であつた利家は五月十五日附を以て藤二郎等四人に書を與へて警戒を促した。後文祿三年藤二郎は伏見の普請無沙汰に付いて、六月十五日利家から三輪藤兵衛・大井久兵衛に命じ、彼の扶持を放たしめた。子孫鳳至郡黒島村に住して百姓となり、徳左衛門と稱した。  
**イマムラハリマ** 今村播磨 初めて前田利長に仕へ、その子孫藩に世襲した。  
**イマムラヒヨウマ** 今村兵部 天正八年前